

厚真町

2019年10月

農林水産省  
北海道農政事務所

# ハスカップファーム山口農園

## ～町に「日本一」を实らせた～



昭和50年代(1970年代後半)、ハスカップが何万本も自生する一大群生地（ゆうふつ）の勇払原野が工業地帯として開発されることになった。「開発が進みハスカップ群生地が潰されていく。」ハスカップを残していこうと町内の人達は、自分の土地にハスカップの木を持ち帰り移植し、育て始めたのが始まりだった。

厚真町には、現在約100戸のハスカップ農家があり「栽培面積日本一」を誇る。

厚真町を日本一のハスカップ産地に育てた「ハスカップファーム山口農園(山口善紀さん)」は、現在3.3haの畑に5,000本のハスカップを育て、1haで苗木生産をするハスカップ農家で知られている。

平成17年(2005年)、山口さん(当時34歳)は、農家を継ぐことを決意した。就農を決断したとき「ハスカップで日本一の農家になる。」そのためには、「厚真町をハスカップで日本一の町にしたい。」と考えた。そして、ハスカップの知名度をアップするため観光農園を開園し、お客さんの



【ハスカップの生長を確認する「山口さん」】

ハスカップファーム山口農園 山口善紀  
(JAとまごまい広域  
厚真町ハスカップ部会副会長)  
北海道勇払郡厚真町字宇隆163-5

### 日本一になる夢、受け継がれた「ハスカップ」

山口農園は、稲作中心の兼業農家だったが増収を期待し、昭和53年(1983年)、酪農を営む母の両親と一緒に勇払原野に自生するハスカップの木を畑に移植したのが栽培の始まりだった。栽培を始めてみると、木によって果実の形や大きさ、味(甘味、苦味、酸味)に大きな個体差があることがわかった。母は、このまま育て販売しては「今はいいがいずれハスカップの需要がなくなる。」と危機感を持ち、当時小学生だった私と弟にハスカップの実がなると食べさせ、苦い味の木を見つけたら、印をつけさせた。印のある苦い味の木を抜いていくことで、いつかは「甘い木だけが残るはず。」と木の選抜を始めた。完全に苦い果実が出ない畑が誕生するまで、約20年もの歳月を要した。そこからさらに、収穫効率を上げるため大粒の木を選び増やしていった。

### 「ハスカップ」栽培と危機感

# 母から受け継いだハスカップで、日本一を実現。

「おいしい。」と言う声が大きな  
励みになっている。



【多くのお客さんが訪れる「観光農園」】

## 受け継がれた「ハスカップ」

平成21年(2009年)、山口農園で選抜されたハスカップのうち、2品種が新品種として「ゆうしげ」、「あつまみらい」の名で登録された。

山口農園に初めてハスカップの木を植えてから実に20年以上もの歳月を経て、親子3代にわたる長年の努力と苦勞が実り、品種登録を成し遂げた。山口品種登録が決定した後、山口

さんは「町内の多くの人がハスカップを育て、おいしさが伝わるのが大事。」だと考え、苗木を町外に持ち出さないことを条件に増殖を許可した。

## 夢の実現、さらなる先へ

ハスカップの普及にかける山口さんの熱意に対して、町や農協もハスカップを町の特産品に育てていこうと、苗木の購入助成を始め支援した。

平成25年(2013年)、町内の栽培面積は28haに達し「ハスカップ栽培面積日本一の町」になった。厚真町をハスカップで日本一の町にしたいとの思いで就農してから9年をかけた一つの夢を実現させた。

山口さんは、ハスカップを原料にしたジャムやスイーツの加工品製造や移動販売車による道内各地での販売活動に取り組みほか、全国のイベントに精力的に出展し、ハスカップのおいしさをPRしている。

さらに、消費者の要望に応えるため、無農薬の自然栽培にも取り組んでいる。

また、厚真町は農業者や商工会、農協で構成する「ハスカップブランド化推進協議会」を立ち上げ、厚真町産ハスカップのブランド化等を進めている。



【ハスカップジャム、クレープとスムージー】



【ハスカップを道内にPRする「移動販売車」】

## 産地復興に向けて

平成30年9月、北海道胆振東部地震で、町内のハスカップも栽培面積の25%が被害に遭った。

山口農園も大きな被害に遭ったが、町の復興のため多くの人がハスカップを知ってもらい、営農の再開に迷っている農業者の励みや、やりがいにつなげたいと決意を固め、震災直後から道内外のイベントに出店するなど精力的にハスカップのPR活動を続けた。

また、多くの方々から沢山の支援が寄せられた。「日本一の産地」を震災以前より拡大して、恩返ししたいと復興への希望をもって、新たな加工品開発の挑戦などに着手する計画を考えている。